

「ところ構文」に用いられる主動詞の特徴について

—アスペクト的特徴を中心に—

加藤理恵

キーワード：アスペクト的特徴 終了限界 持続過程 結果の側面 「ところ」節

1. はじめに

本稿では、次のような例に用いられる主節の動詞についてアスペクト的特徴を中心に分析をすることを目的とする。「『ところ』構文」は、杉本（1994）によるものである。

- (1) 二十六歳になるこの男、そんなことは夢にも知らず、カーテンまでしめて行こうとするところをつかまった。 （寺村（1992 [=1978] : 332)）

その特徴は、次のようなものとされている。上記の例の「つかまる」は補文節をとらず、主節の述語と格関係で結ばれるのは表面上従属節全体であるが実質的にはその一部にすぎないため、何らかの方法によって主節動詞と従属節内の要素を関係づけることが必要となる（レー・バン・クー（1988 : 3）、黒田（1999 : 27）、野村（2001 : 230））というものである。

2. 問題点

2. 1 主節の動詞の意味的な特徴

この表現では、主節の動詞は「かなり限られている」（杉本（1994 : 119）、動詞の類型化がしにくい（寺村（1992 [=1978] : 333））とする先行研究があっても、動詞に注目した研究は少ない。そこで、どのようなタイプの動詞が用いられるのかについて494例¹実例を収集し分析した。その結果、二つの意味的なタイプが用例の数が多く、使用傾向に偏りがあることがわかった。本稿では、そ

の二つのタイプの場合を定着度の高いケースとして考え、以下のような意味的な特徴があると分析をする²。

2. 1. 1 <対象の動きを行わなくさせる>タイプの動詞

<対象の動きを行わなくさせる>タイプの動詞には、以下のようなものがある。

(2) 「止める」

止める、食い止める、防ぐ、引きとめる、呼びとめる、捕まる、押さえる、引き戻す、呼ぶ、呼びとめる、呼び返す、さえぎる、引き取る、抑えつける、中断する、受け止める、拾い上げる、拾う

(3) 「逮捕する」

逮捕する、捕まえる、捉える、取り押さえる、踏み込む、拘置する、引張る、連行する、あげる、持っていく、投獄する、縛る、押さえる、補導する、確保する、取り囲む、御用、任意同行、捕まる、網に引っかかる

(4) 「助ける」

助ける、救う、保護する、救助する、救出する、支える、抱きとめる、助かる、運び込む

(5) 「じゃまする」

じゃまする、呼び起こす、起こす

「とめる」は「動き・続きをやめさせる。」「動き出そうとするのを押さえて動き出さないようにする。」(西尾他(2004:872))とされており、これを<対象の動きを行わなくさせる>とする。ただし、対象の動きだけでなく、その状

1 文学作品(『CD-ROM版新潮文庫の100冊』『CD-ROM版新潮文庫の絶版100冊』『青空文庫』から75作品の計275作品)、『毎日新聞』(1997年、1998年)、インターネット上の文書(検索期間2003年8月)から収集した。

2 各意味特徴については稿を改めて論じたい。

態が変化していく場合も含める。(4)の「助ける」では、対象が置かれた状態を回避した結果が対象にとって好ましいと捉えられることと考え、そのような文脈で用いられた「支える」「運び込む」等をここに含める。「じゃまする」は対象の行為を行わなくさせた結果が好ましくないと捉えられる場合とした。

2. 1. 2 <的にあてる>タイプ

<的にあてる>タイプの動詞は以下のようなものである。

(6) 「打撃」の動詞

蹴る、殴る、追いまわす、追う、打つ、ぶつ、殺す、撃ちとる、突き殺す、斬り殺す、絞め殺す、蹴り殺す、暗殺する、惨殺する、仕止める、撃ちぬく、撃つ、斬る、襲う、反撃する、攻撃する、追尾する、突く、脅す、シュートする、パスを出す、あびせたおす、たたみかける、たたきこむ、たたく、つめる、打つ、迎え打つ

これらの動詞の意味的な特徴としてあげた<的にあてる>は、国広（1970：127-134）の「たたく、なぐる、うつ、あたる・あてる」についての「打撃」の動詞の分析、影山（1996）の「接触・打撃」の動詞を参照したものである。

影山（1996）ではこれらの意味的な特徴は統語的な特徴とも関わるとして、「接触・打撃」の動詞は「テアル構文」に使えない、対応する自動詞が存在しない、働きかけの対象を一つに限定しても何回も動作を繰り返すことができるなどの特徴があるとしている。これらの動詞も以下に示すように、そのような特徴を持つものが多い。

- (7) a ?熊が銃で撃ってある・蹴ってある。
b その熊を銃でたくさん撃った・たくさん蹴った。

ただし、個々の動詞についての詳細な記述も必要であるが、ここでは、共通

性に注目し<的にあてる>という特徴を持つ動詞とする。

2. 2 主節の動詞のテンス・アスペクト的特徴

以上のように「逮捕する」など<対象の動きを行わなくさせる>という意味特徴を持つタイプ、「蹴る」、「たたく」のようなく的にあてる>という意味特徴を持つタイプがよく用いられるという傾向があることがわかった。この二つには「テアル構文」に使えるかどうかなどの違いがあるが、それはテンス・アスペクト的特徴に関わる。他にもこの二つのタイプには、シテイル、受動での解釈が異なるという違いがある。

まず、「逮捕する」「呼びとめる」「助ける」についてシテイルの例を見る。

- (8) 犯人を逮捕している。
- (9) 太郎を呼びとめている。
- (10) けが人を助けている。

「逮捕している」「呼びとめている」は、対象については結果が継続されると解釈できる。しかし「助けている」では、動作の継続と解釈できる。

次に「叩く」「打つ」「蹴る」のシテイルの例を見る。

- (11) 太郎をたたいている。
- (12) ボールを打っている。
- (13) ボールを蹴っている。

「叩いている」「打っている」「蹴っている」はシテイルで動作の継続と解釈できる。ただし、「たたく」のような動詞は、動作としては瞬間的なものであるが、「叩いている」だけでは結果の継続という解釈はしにくい。それについては高橋（1985：93、95）で「たたく」は一回の瞬間的な動作を表すが、連続動作を一つの持続過程として表すこともできるとされている。

次に、能動・受動の対立があるかどうかを見る。これは主体・客体の動作・変化を意味特徴とする分析（奥田（1978ab）・工藤（1995））によるもので、主体動作・客体変化動詞は、主体の観点からは動作を、客体の観点からは変化を捉えているため、このような動詞では能動で〈動作継続〉を、受動では、〈結果継続〉を表す³。

- (14) 熊が殺されている。 (奥田（1978b：23）日本語表記は引用者)

主体動作の「打つ、蹴る、押す」では客体への接触をとらえているだけであるので、能動・受動の対立がアスペクト的意味の違いに結びつかず、どちらも〈動作継続〉を表す（工藤（1995：72））。

- (15) 太郎が花子をなぐっている。

- (16) 花子が太郎になぐられている。 (奥田（1978b：23）日本語表記は引用者)

この分析に従えば、「つかまえる」「呼びとめる」「助ける」は次の例のように受動では対象の結果継続を表すため、「なぐる」などとは異なるタイプの動詞であるといえる。

- (17) 警察が犯人を捕まえている／犯人が捕まえられている。

- (18) 太郎が花子を呼びとめている／花子が呼びとめられている。

- (19) 太郎がけが人を助けている／けが人が助けられている。

以上のようにこの二つのタイプは、シテイルの意味や「テアル構文」に用いられるかどうか異なる。テンス・アスペクトの特徴から見ても、二つの異な

3 動作の行われる空間があれば、動作の継続にもなる。

(i) 谷間で熊が殺されている。 (奥田（1978b：23）日本語表記は引用者)

るタイプの動詞であるとするべきであろうか。それとも共通性はあるのだろうか。そこで以下ではこれらの動詞のテンス・アスペクト的特徴について考察をする。個々の動詞の振る舞いが全く同じでないことは予想されるが、ここでは使用される傾向の高い意味を代表として、その傾向を分析していくものとする。

3. 主節の動詞のテンス・アスペクト的特徴

3. 1 分類の指標

テンス・アスペクトの観点からなされた日本語の動詞分類の一つに、動作の長さを指標にする金田一(1976 [=1950])の動詞四分類がある。これは、工藤(1995)によれば、シテイルを、アスペクトを表す有意味的単位(分析的形式)として扱うことによって、文法的意味と語彙的意味(つまり動詞分類)との相関関係を明らかにしたものである。この分析は、鈴木重幸、高橋太郎、藤井正、吉川武時へと受け継がれていくが、奥田(1978ab)では、金田一の分類がスル・シテイルの対立を捉えていないこと、また、動詞の意味とアスペクチュアルな意味が区別されていないことなどを批判し、スル・シテイルに共通する動詞の語彙的意味として<主体の動作>か<主体の変化>かが新たな意味特徴にされている。

以後の研究でも指標について議論がつづけられているが、本稿では、動詞をアスペクトの観点からは「限界性」「持続過程」「結果の局面」の有無という3つの基準に基づき記述する。そしてこれらの動詞には、終了の局面に焦点をあてる終了限界が有り、持続過程が考えにくく、結果の局面を重視しないという特徴が共通してあると考える。以下では、まずその基準について確認をし、次にこの3つの基準について順に述べていく。

3. 1. 1 終了限界

動詞は、「限界性」というアスペクト的特徴からも分類されることがある。工藤(1995)では同じ分類が、<運動が必然的に尽きる内的時間的限界>という限界性の有無の観点から分析されている。それによれば、動詞の語彙的意味の

中にある時間的限界は<内的時間限界>で、主体動作・客体変化動詞および変化動詞がこれに含まれ、<非限界動詞>には動作動詞が含まれるとされている。工藤（1995）・金水（1995）のように、時間的限界のある動詞は変化動詞であるという捉え方をする先行研究もある。

しかし、時間的限界のある動詞は、変化動詞とは限らないとする先行研究もある。森山（1986：88）では、「入浴する」のように、動きの時間的な全体が決まっている場合も時間的限界のある動詞にあげられている。さらに「たたく」「打つ」なども、動作動詞ではあるが内的限界性がある。そのようにとらえる先行研究には、須田（2000）、川野（2001）がある。

本稿では後者に従い、<限界動詞>には、動きの全体が決まっている「入浴する」のようなものも含められると考える。つまり、終了限界には、運動の終了限界と、変化の終了限界がある。

3. 1. 2 持続過程

動詞の語彙的意味を記述するためには、運動に持続過程があるかどうか必要であると考えられる。工藤（1995：46）のように「運動の時間的長さの特徴づけは、動詞の語彙的意味自身の中にあるというより、むしろ「一瞬（に）、2時間（で）、ずっと」のような時間副詞が担うのではないだろうか」という見方があるが、森山（1986）・三原（1997）では次のような例があげられ、持続過程の有無という特徴も必要であるとされている。

(20) 機内高度がぐんぐん上がっています。 (森山（1986：90）)

(21) 桜の花がヒラヒラと散っている。 (三原（1997：117）)

「上がる」「散る」は金田一の瞬間動詞、奥田の変化動詞であるが、この例での「上がっている」「散っている」は結果の継続ではなく、動作の継続を表す。それに対しては、「持続過程がある」という説明が必要だからである。

ただし三原（1997）ではこのような変化動詞しか取り上げられていないが森

山 (1986) では動作動詞についても述べられている。例えば「見かける、目撃する」の「見かけている、目撃している」が一度そういうことがあったことを問題にするような意味にしか解釈しにくいのは、動詞に持続過程がないからとされている。しかし「うつ」「たたく」は、連続動作を均質的な一つの過程とみなせるため、「見かける、目撃する」などとは別にされている。

本稿でも、森山・三原で述べられているように、動詞に持続過程があるかどうかは必要であると考え。一つには、変化を表さない動詞であっても、シテイルで動作継続とは解釈できない動詞が先行研究で挙げられており、その数は少なくはないからである。

- (22) はっとする、直覚する、でくわす、命中する (高橋 (1985 : 93))
 (23) 一瞥する、遭遇する、知り合う、(上程を) 見送る、目撃する、(表に) 飛び出す、(事件が) 起きる (藤井 ((1976 [=1966] : 109))
 (24) 見掛ける、目撃する、ひらめく、一瞥する、おどろく、命中する、あきれる、飲みこむ、ほかんという音が聞こえる (森山 (1986 : 95))

「うつ」「たたく」なども、一つの動作としては、持続過程の想定しにくい動作である。均質的な「連続動作」とは「うっている」となった時の意味だからである。

二つめは、アスペクトの記述の対象をスル・シテイル以外にも広げた場合、持続過程が捉えられるかどうかにも必要になるからである。例えば「しつづける」では主体変化動詞はいいにくいといわれている。従来先行研究ではつかないとされている中にも用いられる動詞があることが黄 (2004) で指摘されている。

- (25) 増えつづける・進みつづける・上がりつづける・上りつづける
 (26) *帰りつづける・戻りつづける・来つづける・引き返しつづける

(黄 (2004 : 154))

この違いは、「しつづける」では持続過程を取り上げやすい「上がる」などはいえるが、終了限界が際立つ「帰る」などでは言いにくいというものである。

このように、動作過程にも持続過程が想定しやすいものとそうでないものがあり、また、変化過程にも持続過程が取り上げやすいものとそうでないものがある。このことから、持続過程の有無も、その二つから共通性を抽出したものと考える。

3. 1. 3 結果の局面

「結果の局面」とはこれまで先行研究で示されているものである。高橋(1985)では、動作がいくつかの局面から構成されるとされ、例えば、変化動詞の表す変化過程は、運動の局面と結果の局面から成り立つ。そのような局面が、継続相が表すアスペクト的な意味の実現に関わっている。

本稿では、この「結果の局面」に、位置変化や姿勢の変化が起きるような場合も含める。例えば「座る」「立つ」「寝る」のような動詞のシテイルは、運動の局面があるかどうか判断が微妙であるとされる動詞である。しかし「座っている」「立っている」「寝ている」では、明らかに人は何らかの結果の局面を持つ。移動動詞については、川野(2001)で「移動」という「運動の局面」と「結果の局面」を持つとされている。このようなことから、動作においても結果の局面があるといえる。

以上のように、結果の局面には、運動によらない変化の結果の局面も、運動による変化結果の局面もある。このことから、「結果の局面」も、どのようなことによってもたらされたのかは問わず、運動による変化、よらない変化両方に共通するものと言える。

3. 2 主節の動詞のアスペクト的特徴

前節でみたように、本稿では、動詞をアスペクトの観点からは「限界性」の有無、「結果の局面」の有無、「持続過程」の有無という3つの基準に基づき記述する。これらは、いずれも動作によるものと変化によるものがあり、その共

通点として出されたより抽象的なレベルの意味特徴であると言える。

以下では、それぞれの指標に基づいて、動詞の分析をしていく。

3. 2. 1 限界性の有無による分析

「限界性」の有無をみるテストとして「30分(で)」「～瞬間」「ひと～」を用いて考察していく。

3. 2. 1. 1 時間副詞

動詞句の限界性を論じた研究に、北原(1999)があり、そこでは、AtelicとTelicな動詞句を区別するテストとして「期間Q(30分)」と「期間Qで(30分で)」を用いたテストがあげられている。「期間Q(30分)」と共起する動詞句はAtelicな動詞句で、「期間Qで(30分で)」と共起する動詞句はTelicな動詞句である。以下ではこのテストに基づいて、検討する。

(27) 30分で犯人を逮捕する／30分で自殺を止める／30分で太郎を助ける

「逮捕する」「止める」「助ける」は「期間Qで」と共起することから、Telicな動詞句と言える。しかし「期間Q」とは共起しない。

(28) ?30分間犯人を逮捕する／?30分間自殺を止める／?30分間太郎を助ける

いずれの例も不自然に思われる。これは、「逮捕する」「自殺を止める」「助ける」は主体の動作を表すが、30分だけ行うというように、時間を区切って行うことは通常ないからであろう。

「止める」の場合、「30分間車を止める」とは言えるが、動作の継続ではなく、車の停止時間を表す。これは後に述べる「結果の局面」に関わる。

次に「たたく」「うつ」「なぐる」の例をあげる。

(29) 30分で肩をたたく／？30分でボールを打つ／？30分で太郎を殴る

「肩をたたく」の場合、何らかの効果が感じられた状態になるまでという限界を想定した場合に言えるだろう。「ボールを打つ」や「太郎を殴る」では不自然であるが、これはやはり動作の長さにかかわるのではないだろうか。このことは後の「持続過程」でも取り上げるが、これらの動作は一瞬のことなので、それに合う時間副詞であれば言える。

(30) その瞬間にボールを打つ。

(31) その瞬間に太郎を殴る。

このような例から、これらの動詞は「期間Qで」と共起する、あるいは、短い期間を表す副詞と共起することから、限界性があると言える。ただし、「うつ」「たたく」「なぐる」が連続動作と解釈された場合は、「期間Q」とも共起できるので、限界性がないものとなる。

3. 2. 1. 2 「～瞬間」

森山（1986：81）では、次の例をあげ、動きの始まりだけで動作が成立するかどうかは、「～瞬間」の意味に現れるとされている。

(32) 部屋を整理した瞬間

(33) 道を歩いた瞬間

「整理する」は動きが完成したとき、即ち「部屋が整理できた時」をさすが、「道を歩く」は歩き始めたときにも言える。つまり「整理する」は動きの始まりだけでは動作が成立したとは言えないが、「歩く」は言えるのである。次の例のように、「たたく」「つかまえる」「とめる」は前者と同じ解釈になる。この場合、一回の動作である。

(34) 犯人を逮捕した瞬間／自殺を止めた瞬間／太郎を助けた瞬間

(35) 肩をたたいた瞬間／ボールを打った瞬間／太郎を殴った瞬間

以上のことから、このような動詞は、終了限界を持つという特徴を共通に持つといえる。

3. 2. 1. 3 「ひと～」

次の「ひと～」も、三原（2004：25）で限界性のある動詞かどうかをわけるものとしてあげられており、このテストでは「つかまえる」と「たたく」は異なるタイプとなる。

(36) 非限界動詞

a. ひと泳ぎする／ひと休みする／ひと眠りする

b. ひと突きする／ひと刺しする／ひと押しする／ひと拭きする

(37) 限界動詞

a. *ひと殺しする／*ひと切りする／*ひと作りする／*ひと壊しする

b. *試合にひと勝ちする／*間違いをひと見つけする

「つかまえる」「とめる」「たすける」は限界性があるのでこの表現には用いられないが、「たたく」などは次のように言える。

(38) ひとつち／ひとたたき／ひとさし／ひとさし

この場合、「泳ぐ」「休む」などは「量」や「程度」を計測するとされており、「少し泳ぐ」「少し休む」と解釈されるのに対し、「刺す」「うつ」などは「少し刺す」「少しうつ」というより、「一回うつ」「一回たたく」と解釈される。このことから、連続動作にもなる「たたく」「うつ」などは、一回の動作として取り出すという「限界性」が明示されている動詞であるといえる。これは、限界性

がない動詞を量的にとりだす他の非限界動詞の場合とは異なるのではないだろうか。「ひと～」では、「つかまえる」と「たたく」は同じタイプであることは示せないが、「たたく」などが「休む」などとは異なることは言える。

3. 2. 1. 4 まとめ

以上の「～した瞬間」「ひと～」という表現から、「つかまえる」「うつ」は、動きの始まりだけではその動きは成立したと言えない動作の終了の局面に焦点が当たる動詞であることが共通すると結論づけられる。

3. 2. 2 動作の持続性の有無による分析

ここでは、動作の持続性があるかどうかを考察する。

まず、「うっている」は均質な連続動作であることもあるが、一つの動作を継続しているかは、対象がなければ分からないことを確認しておく。このことに対して吉川（1976 [=1973]：198-199）では、「大根を切っている」が数片を切り取る連続した動作であるのに対し、「大木を切っている」は一本の木を切る作業であるという違いをあげ、対象語によって「切る」の意味範囲のどの部分が実現されたのかが異なるだけで、別のものではないとされている。

以上のようなことから、「うつ」の場合も、動作が一回か複数回かはその対象によるもので、それに共通する一つの動作としては、持続過程が想定しにくい動作と考える。

前節であげたように、連続動作とは考えにくい場合は、シテイル及び長期間を表すような副詞とはなじまない。

(39) ?ホームランを30分間うっている。

(40) その瞬間にホームランをうった。

しかし、連続動作が一つの行為と捉えられている場合は、言える。

(41) くぎを30分間うっている。

一回だけの動作なら、次の例もいえる。

(42) その一瞬にくぎをうった。

以上のようなことから、「うつ」という動作には、持続過程がないと考えられる。

このような持続過程の有無は「逮捕する」「呼びとめる」「助ける」にも必要である。動作の継続であることがわかる副詞には、「徐々に」「しだいに」もあげられる。

(43) しだいに・徐々に？助けていた／？よびとめていた／？逮捕していた。

(43)の例も、あまり自然ではない。吉川で「状態の変わり目が瞬間」とされているように、「つかまえる」では自由な状態から拘束された状態に変化する瞬間が、また「助ける」では好ましくない状態からそうではない状態への変化する瞬間が捉えられており、言いかえればそれは前節で見たようにその動作が完成するときである。「しだいに」「徐々に」とは合わないだろう。

このようなことから、これらの動詞は一つの行為として動作の完成に注目するため、持続過程が想定しにくい動作であることも共通しているといえる。

3. 2. 3 結果の局面

「つかまえる」は工藤によれば客体変化動詞で、「たたく」は客体接触動詞であり、異なるタイプの動詞である。しかしこれらは結果の局面にはあまり注目をしていない。ここでは変化の局面の有無をみるために、副詞を用いたテスト（高橋（1985）森山（1986）影山（1996））と、「テアル構文」を用いる。

3. 2. 3. 1 時間副詞

まず、結果の局面のある動詞では、「一時間」など時間を表す副詞で、結果の持続という局面を取り出すことが可能である。

- (44) a. 時計が³一時間止まる (「止まっている状態の持続が一時間」)
 b. *太郎が³一時間目撃する。
 c. 太郎が³一時間泣く (「運動の持続が一時間」) (川野 (2001:28))
- (45) 車を一時間止める。(「止めた状態の持続が一時間」)
- (46) たこを一時間上げる。(「上げた状態の持続が一時間」)

「逮捕する」「呼びとめる」「助ける」の場合、次のような例となる。

- (47) *犯人を3年逮捕する。
 (48) ?客を3時間呼びとめる。
 (49) ?けが人を3時間助ける。

「逮捕する」では対象が逮捕された状態とも、動作が継続するものとも解釈できない。「呼びとめる」は客が動かない状態であるように解釈できないこともないが、長時間続くなれば「引止める」、或いは「呼び止めておく」などが選択されるのであろう。「助ける」も動作の継続では不自然に思われる。

このような動詞は、影山 (1996) や森山 (1986) に説明があるものにあたると思われる。

- (50) *その夫婦は30年間結婚している。 (影山 (1996:101))
 (51) *しばらく生まれていた。 (森山 (1986:96))

影山 (1996:101) では、日本語の「結婚する」は、「結婚式をあげる」「婚姻関係を結ぶ」といった一度きりの行為を表すとされ、森山 (1986:96) では、

「変化の結果が持続するという期間を設定できないもの」で「主体変化の起こる一点的なときだけが取り上げられる動詞」とされている。「逮捕する」も「助ける」も、客体変化動詞であるが、その主体の行為が行われるかどうかで、動作の継続もなく、期間を表す副詞とも合わない。このことも言い換えれば、行為の終了限界が取り上げられていることを示している。

3. 2. 3. 2 「テアル構文」

前述のように影山（1996：73）では、「テアル構文」が動作動詞と変化動詞を分けるテストとして用いられている。

- (52) a. 鍵が開けてある
 b. 洗濯物が乾かしてある。
 c. セーターが編んである。
 d. おにぎりがにぎってある。
- (53) a. *お父さんの肩がたたいてある。
 b. *ボクシングの相手がなぐってある。
 c. *杖が握ってある。

以上の例のように、(52)の動作変化動詞は「テアル構文」が言えるが、(53)の動作動詞の場合は言えない。「テアル構文」は、「過去に実現したことの結果として現在の状態を述べる」（寺村（1984：147）、「処置の結果の存在」（寺村（1984：151））とされているように、次のように対象の変化を表さない「たたく」「うつ」などは、この表現には用いられない。

- (54) a. *太鼓が打ってある。
 b. *熊が撃ってある。
 c. *太郎がたたいてある。

しかし、「呼びとめてある」は言えるが、客体の変化をとらえる「逮捕する」「助ける」であっても言いにくい。

- (55) a. *犯人が捕まえてある。
 b. *けが人が助けてある。
 c. 太郎が呼びとめてある。

「テアル構文」が言えない動詞については、杉村（1996：68）で次のように説明している。

- (56) 誰かと会った瞬間にその目的も達成されてしまう。「待つ」にテアル形がないのは、待った後の結果の有効性を表す必要がないからである。

「歌ってある」に対して「待ってある」が言えないのは、有効性に違いがあるというものである。「逮捕する」「助ける」でも、行為の終了と同時にその目標が達成されるため、その後の結果には関心がないと考えられる。このことも、動作の終了の瞬間が捉えられていることを示すといえる⁴。

4 おわりに

以上のように、本稿では、「ところ構文」に用いられる傾向のある動詞「つかまえる」「助ける」「とめる」「たたく」「うつ」には、共通のアスペクト的特徴があることを示した。その意味特徴は、動作の完成に焦点がある「限界性」の

4 寺村（1983：149）では、「人がぶら下がっている」のほうが自然で「人がぶら下げている」とは言えないことに対して、次のように説明している。

(ii) 人がある自動詞で表される動作作用をしているときは、自らの意思によらぬとは限らぬとしても、それが他の意志でさせられているというふうには人は思わないのがふつう

「逮捕する」「助ける」も人を対象にとる。「捕まる」「助かる」という自動詞があることも関わっているのではないかと思われる。

ある動詞で、「持続過程」が想定しにくく、結果の局面には関心がないというものである。これまでのアスペクトに関する研究では、一つの動詞にも関わらず文脈によってアスペクト的な意味が異なるという問題も指摘されているが、それに対してアスペクト的な意味は動詞の語彙的な意味だけでなく、名詞句や副詞的成分も関わるという考え方も出されている。言い換えればこの構文は、これらの動詞が上記の特徴を示す一つの文脈であると結論づけられる。

引用文献

- 奥田靖男 (1978a) 「アスペクトの研究をめぐって上」教育科学研究会国語部会『教育国語』53, pp.33-44.
- 奥田靖男 (1978b) 「アスペクトの研究をめぐって下」教育科学研究会国語部会『教育国語』54, pp.14-27.
- 影山太郎 (1996) 柴谷方良他編日英語対照研究シリーズ(5)『動詞意味論——言語と認知の接点——』くろしお出版.
- 川野靖子 (2001) 「ヲ格を伴う移動動詞句について——アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ——」筑波大学国語国文学会編『日本語と日本文学』33, pp.25-38.
- 北原博雄 (1999) 「日本語における動詞句の限界性の決定要因——対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論——」黒田成幸・中村捷『ことばの核と周縁』pp.163-200, くろしお出版.
- 金水敏 (2000) 「時の表現」仁田義雄・益岡隆編『日本語の文法』pp.3-92, 岩波書店.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』pp.5-26, むぎ書房所収.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房.
- 国広哲弥 (1970) 『ELEC言語叢書意味の諸相』三省堂.
- 黒田成幸 (1999) 「トコロ節」黒田成幸・中村捷編『ことばの核と周縁』pp.105-162, くろしお出版.

- 黄文溥 (2004) 「シツツケルの意味分析」『世界の日本語教育』14, pp.149-165.
- 国立国語研究所 (1985) 『国立国語研究所報告82現代日本語動詞のアスペクトとテンス』
秀英出版.
- 杉村泰 (1996) 「形式と意味の研究——テアル構文の2種類——」『日本語教育』91, pp.
61-72.
- 杉本武 (1994) 「『警察はその泥棒がにげていくところを捕まえた』再考」『九州工業大学
情報工学部紀要 (人文・社会科学篇)』7, pp.109-132.
- 須田義治 (2000) 「限界性について——限界動詞と無限界動詞——」『山梨教育大学教育人
間科学部紀要』1-2, pp.87-94.
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本後動詞のアスペクトとテンス』秀英出版.
- 寺村秀夫 (1978) 「『トコロ』の意味と機能」『語文』34. 大阪大学国文学科 寺村 (1992)
『寺村秀夫論文集』I, pp.321-336, くろしお出版所収.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 (2004) 『岩波国語辞典第六版』岩波書店.
- 野村益寛 (2001) 『参照点構文としての主要部内在型関係節構文』山梨正明他編『認知言
語学論考No1』pp.229-252, ひつじ書房.
- 藤井正 (1966) 「『動詞+ている』の意味」金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペク
ト』pp.96-116, むぎ書房所収.
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」中右実編『ヴォイスとアスペクト』研究者出
版.
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
- 森山卓郎 (1986) 「日本語アスペクトの時定項分析」宮地裕編『論集日本語研究1』pp.
78-116, 明治書院.
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編 (1976) 『日本語動
詞のアスペクト』pp.155-327, むぎ書房所収.
- レー・バン・クー (1988) 『ノによる文埋込みの構造と表現の機能』くろしお出版.

付記

本稿は、「2006（平成18）年度 日本語教育学会研究集会」（2006年6月10日 於鹿児島大学）において発表した内容に加筆・修正をしたものである。貴重なご指摘をいただきましたことに感謝申し上げます。

各論文要旨

A Study on the Verbs with a Construction Containing TOKORO

KATO Rie

This paper examines the aspectual meaning of main verbs of a construction containing TOKORO. The results are as follows : these verbs focus on the terminal point of an action ; they don't pay attention to process or result.